

# 崎山ひろみ文庫





# 「崎山ひろみ文庫」の設置にあたり

— 高知県の新たな平和研究のシンボルとなることを願って —

高知大学学長特別補佐（研究・地域担当）

人文社会科学系人文社会科学部門

吉尾 寛

2018年8月9日

このたび崎山ひろみさまより旧満洲関係の書籍、凡そ一千冊を御寄贈いただき、かつそれらを一括して「崎山ひろみ文庫」と命名し高知大学学術情報基盤図書館に設置させていただけることに対しまして、崎山さまをはじめ学内外の関係の皆さまに心からお礼を申し上げます。

「崎山ひろみ文庫」は、「旧満州引き揚げ」をテーマとしてそれに関わる以下のような多くの分野を有しております。

- ① 引揚者の証言を集めた書籍（地方・中小出版社、関係機関・団体等の出版、自費出版等）
- ② 敗戦後旧「満洲」在住者が当時を語り或は現地を再訪問した記録、旅行記
- ③ 「満洲」研究に役立てられる実証性の高い研究書
- ④ 「満洲」研究を行う上での参考図書
- ⑤ 日本近現代史の戦争、戦地等に関する参考図書
- ⑥ 「満洲」引揚者が所持し持ち帰った歴史文物、「満洲」在住時に使用していた文書資料（複写物）

高知大学では、人文社会科学部門において4つの研究プロジェクトを進めておりますが、私はそれらのプロジェクトの一つ「地域における平和学研究」を主に担当しています。この活動の過程で、3年前より、高知県を中心とする旧「満洲」引揚者に対する聴取調査に参加させていただくようになりました。この時調査の中心にいらしたのが崎山ひろみさんでした。

崎山さんは、旧「満洲」引揚者としてのご自身の体験を踏まえて、他の引揚者の方々の証言、関係の書籍、資料の収集に尽力しておられ、高知県はもとより、全国で同じ活動を行っている方々、また専門の研究者の方とも広く交流をもっていらっしゃいました。

即ち、「崎山ひろみ文庫」は、上述の崎山さんの活動はもとより、崎山さんの意思に共鳴し、支援された方々の活動の集大成といっても過言ではありません。実際、文庫には、崎山さんが学生時代の同窓生、満洲国協和会の関係者、高知の満洲会の方たち等に呼びかけ、そこで寄託された書籍も多く含まれており、崎山さんご自身も均しくそれらの公開を望まれました。

※

崎山さんの書籍・資料の収集は、2010年5月から本格的に始まっています。県内の関係機関、高知県立歴史民俗資料館をはじめ、山内家宝物資料館（引き続き、現高知城歴史博物館）も早くからその活動に注目し、2013年から貴重書・史料を一部預かり受けるようになりました。しかし、当時図書館、博物館が組織改編を控えていたこともあり、書籍・資料の、いわば最終帰着点はなお定められずにありました。



昨2017年5月当該の書籍・資料の設置のあり方について実務者レベルの協議の場が持たれ、それに吉尾も加わることになりました。そこで、貴重資料（書籍以外）は高知県立歴史民俗資料館に、書籍は高知大学にそれぞれ

寄贈する案が浮上しました。崎山さんご自身もそれを望まれました。このことを受けて、吉尾は本学学術情報基盤図書館長ほか大学執行部の方々に検討をお願いし、その結果、受入れが決まり、2017年10月18日、書籍は一括高知大学に搬入されました。図書館職員の方々にはその後の登録作業等に大変ご尽力いただき、今日の公開の日を迎えることができた次第です。（複写物等は人文社会科学部棟の一室に別置される予定です）

※

ここで崎山ひろみさんについて少し紹介させていただきます。（本文末尾に崎山さんご自身が作られた年表「満洲国の歴史と私の暮らし」を掲載しています。あわせてご覧ください）

1930（昭和5）年6月13日、崎山さんは、父崎山信義（高知県本山村（現本山町）生）、母滋子の長女として満洲撫順市で生まれました。ご両親は1924（大正13）年に満洲に渡り、ひろみさんが生まれた時、父信義さんは満鉄撫順炭鉱事務所に勤務し、その後ご家族は大連に転居されました。1936（昭和11）年、信義さんが「満洲国協和会」に転職するのに伴い、ご家族は満洲国の首都新京に引っ越しされました。崎山さんは、翌年新京の白菊小学校に入学、1943（昭和18）年には同市の敷島高等女学校に進まれ、女学校では寄宿舎での生活が始まりました。新京は、崎山さんにとって正に多感な青春の日々を過ごした街といえるでしょう。

その生活が大きく変わったのが、1945（昭和20）年5月でした。

崎山さんは「学徒動員」により関東軍の工場の中で「和紙風船づくり」に従事するようになり、それは同年8月9日のソ連参戦まで続きました。（この仕事が「風船爆弾の風船づくり」であり、それが「731部隊」にも関わる作業であったことを崎山さんが知ったのは、帰国後50年以上経ってからのことでした。）

その間にアメリカ、イギリス、中国（中華民国）はポツダム宣言を発表。8月6日には広島に原子爆弾が落とされました。そして8月9日、長崎への原爆投下の同日、ソ連が中立条約を破り国境を突破し侵攻が始まりました。ソ連参戦は、在満日本人の生活を根底から揺るがすものでした。崎山さんはこの日から「在満日本人の逃避行」が始まったと言います。

※

実際、8月13日ご家族5人は、協和会住宅に住んでいた約20世帯の方々と一緒に新京を離れます。「玉音放送」は、8月15日、中国人集落が近くにある避難先の兵舎（新京郊外南約30km）で聴かれたとのこと。新京に戻ったのは翌16日。父信義さんは18日に避難民救済のため部下1人と南満洲に向かいます。以後崎山さんは母親、妹（洋子）、弟（健三）の四人で新京に止まって命を繋ぐ日々を過ごし、そうした状態は信義さんが戻る翌46（昭和21）年7月まで続きました。

当時を振り返る時、崎山さんは、在満日本人が2度にわたって日本政府から「棄」てられた——「棄民」されたことに強い憤りを感じます。1度目は、「風船づくり」の作業に専心していた45年5月30日の時点で「大本営」が満洲の北部、西部など4分の3を放棄する命令を出し、関東軍は既に本拠地を南満洲方面に移動させ始めていたことであり、2度目は、日本政府が無条件降伏した時「居留民は出来得る限り定着の方針を執る」とし、他方で「日本国籍を離るるも支障なきものとす」と発表したことであるとされます。

家族の引き揚げが始まったのは同年8月、葫蘆島から引き揚げ船に乗ります。引き揚げ者の世話役であった父信義さんに『遣送便覧』（引き揚げの手引き書。「文庫」にはその原本が収められています）が渡され、そこに記された指示に従い、厳しい制約のもと帰国します。

---

『遣送便覧』には、監修した中華民国側の「日僑俘管理処」の序文「日僑を送る言葉」にこのように記されていました。

諸君が帰国されたら、この中国の気持ちをよく内地の人に認識させ、将来の中日合作に寄與されたい……。諸君の使命は軍国専制日本の改造と、民主自由日本の建設にある。諸君は敗戦以後一年の尊き経験に基き、万難を排して民主日本、平和日本、而して中国の善隣建設に努力されたい。

他方、校閲した日本側の「長春日僑善後連絡処」の序文「出発する同胞に与ふ」にも、

改めて申上げるまでもなく、遣送は私達外地在留日本人に与えられた運命の一つの段階でありまして、私達のなすべきほんとうの仕事は寧ろ内地に帰ってからに在るのであります。即ち民主的新日本を建設し世界平和に寄与することを建前として、今後の真の中日提携を推進し実践して行く者は、東北に在住した私達の光栄ある使命であり、義務でなければなりません。

と述べられていました。

---

日本の地を踏んだのは1946（昭和21）年9月12日。崎山さんが「この時が自分の終戦と思った」と言います。

崎山さんは高知に着いて、一ヶ月を待たず高知県立高知高等女学校に転校できました（46年10月1日）。新京から絶対に失わないように持ち帰った修学証明書の御蔭でした。

高知市内の引揚者住宅で暮らす中、49年4月に本校を卒業。程なく就職されます。55年4月に結婚。娘二人を育てあげ、1988（昭和63）年に定年退職されました。

後に崎山さんは、「15才の学徒動員―旧満洲国新京特別市にて」なる一文を書いています。その中で、引き揚げからこの方、自身の気持ちを次のように書いています。

---

（1945年）8月10日、日本はポツダム宣言を受諾し15日には敗戦の玉音放送。日本人の学校は全て閉鎖された。（校舎は避難民の収容所になった。）

それからはソ連軍の進駐による治安の悪化で、恐怖の日々が2ヶ月余り続いた。その後少し治安が良くなってからは、日本人はほとんど失職していたので、持ち物を売ったり、いろいろな商いをして生活費を稼いだ。

翌1946（昭和21）年3月に学校から集合するよう連絡があった。3年生になって授業を受けたのは4月1ヶ月だけだったが、そこで女学校3年生の修了書もらった。

8月になって私の家族も日本へ引き揚げることになり、私が生まれ育った「満洲」での暮らしは終わった。

日本に引き揚げることができた私達は無一物からの再出発で、並大抵の苦労ではなかったが、それでも時折同窓生達と集い、思い出話もできることは幸せなのだと思う。しかし、日本の敗戦による混乱で、クラスメートの中には行方不明の人、死亡した人、残留をした人たちもいて、「満洲」での15歳の体験として、その後もずっと心に重く残っている。

私達も間もなく喜寿を迎える。 2006年4月10日 崎山ひろみ

---

※

退職から10年後の1998（平成10）年12月、崎山さんは、高知で「満洲よりの引き揚げ者の集い」を結成します。

そして、喜寿を迎える2006年、崎山さんは、自分の学徒動員の体験を振り返りながら、風船爆弾の作業を共に行った8名の方に手紙を書きます。先に紹介した「15才の学徒動員―旧満洲国新京特別市にて」は、実は、その頃新京の女学校の同窓会に出席された時の事を書いたものです。冒頭には次のようにあります。

---

### 「15才の学徒動員―旧満洲国新京特別市にて」

京都で久しぶりに「満洲」時代の敷島高等女学校の同期生が20数名集まり、昔の思い出話に皆興奮気味だった。そのうち初めて学徒動員のことが話題になった。

武器弾薬を供給していた部隊のこと。関東軍司令部でモールス信号を覚え、通信の仕事をしていた話。航空部隊で作業した人は、満洲各都市及びチタ、ハバロフスク等の気象をモールスで受信し白地図に地域ごとに記入していくと、その日、その時の気象が解明でき、これにより航空機が発着できるというかなり専門的なむずかしい仕事をしていた話。この人たちはソ連参戦で部隊と共に大連へ移動して、敗戦後大変な苦労をしたという。そして私と同じ体験をした同席者8名の者の風船爆弾製造の話など。

15才の少女には背負いきれない程の重荷を「お国のために。」「撃ちてし止まん。」と頑張ってきた事などが次々と語られた。

私は皆の話を聞きながら、次第に記憶が薄れてくる年齢になったので、今のうちに自分の学徒動員体験を書いておこうと思った。

1945（昭和20）年の春、敷島高女3年生の新学期を迎え、授業の合間には校内作業もしていたが、5月に入って学徒動員令が出て授業は打ち切りとなった。私達のクラスは孟家屯（新京郊外南）にある部隊で作業をすることになり、毎日学校から部隊まで10キロ余りの道のりをトラックで往復した。

各部隊に武器・弾薬などを供給する部隊だったようで（武器工廠）、私達は5～6人のグループで武器の手入れや部品を数えて箱詰めするなどの作業をしていた。日常的に世話をしてくれた兵隊は少し年配の兵卒で方言なまりのある人だった。武器を磨く時、松やにの塊でゴシゴシこすっていたのだが、その人の故郷では松やにのことをチャンというらしく、「チャンに力を入れてちゃんと磨きなさい。」と言うので、皆下を向いてくすくす笑ったり、なごやかだった。時々見廻って来る岩崎少尉は、若くて背が高く、すらっとしてハンサムだった。物静かな感じで話し掛けてくれるので、皆少尉が来るのを楽しみにしていた。「この部隊に高田浩吉がいて、今晚は演芸会があるんだよ。」と教えてくれたりもした。長谷川一夫もいたそうだ。

他のグループでは、落下傘用の絹糸の仕分けをしたり、馬具を磨いたり、驚いたことに爆弾も作っていて、爆発事故もあったという。ここでの仕事は5月末頃終わった。今思い当たるのは、ちょうど5月末に日本大本営の命令で満洲の4分の3を放棄して、朝鮮国境近くの通化に関東軍の本拠地を移し、「満洲」各地にある部隊も南満へ移動を始めた時期なのだ。在満日本人の一般人は何も知らされていなかった。

---

この文章は、ここから「風船爆弾づくり」をめぐって克明に綴られていきます。

---

私たちは6月に入って敷島高等女学校のすぐ近くの独立守備隊だった第4連隊で作業することになった。ここは昔からの立派な建物が立ち並んでいたが、兵隊はあまりいなかった。ここも部隊の本隊は移動した後だったのか、残った兵隊はわずかで、日本から徴用された女子挺身隊の人たちが私達と一緒に作業しながら指導をしてくれた。部隊の中の工場で、私が最初に与えられた仕事は、気球原紙をつくることだった。2人1組で、1面が畳1枚くらいの大きさの4面が熱せられた鉄板に、こんにゃく糊を刷毛でぬる。その上に縦3尺(90cm)横6尺(180cm)の和紙を2人で両端を引っ張りながら貼る。そして空気が入らないよう、乾いた刷毛で手早く刷く。鉄板を回転させて次の面にまた糊をつけ、和紙を貼り、4面の鉄板を廻しながらこれを繰り返す。5～6枚（この枚数は皆の記憶が曖昧だが、私の記憶で書く。）重ね貼りをし、乾燥させる。仕上がってからバリツとはがすとかなりの重さになった。1日中立ち仕事で、手を上げっぱなしなのでひどく疲れ、家へ帰るとぐったりするほどだった。

1ヶ月位経つと私は釜場の方の仕事になった。直径3メートル位の大きな釜に煮えたぎったグリセリンが入っていて、その中へ気球原紙を入れて煮る。周りに7～8人立って、それぞれがボートの櫂のようなものを使ってかき混ぜながら、ゴムのようにやわらかくなるまで20分位煮る。それを櫂で持ち上げて桶に出すのだが、これが重たくて大変だった。その時熱い液が飛び散り腕にかかる。母が火ぶくれになった腕を見て「何をしている？ どうしてこんなことに・・・」と言うが何も言えない。ものすごい湿気の中での作業で、重労働に耐え切れず倒れる友人が何人もいた。私も肋膜炎と脚気になり、病院で背中から肋膜液を抜かれた。微熱もあり、足もだるくつらい日々だった。それでも休まず毎日行っていたので、その後は少し体が楽な検査室の仕事になった。—8月になっていた。

検査室に来て初めて自分達の作っているものが風船爆弾の気球になる部分だと分かった。この作業のことは絶対秘密で、親にもしゃべっては行けないと釘をさされていた。ある日の帰り道、友人達とおしゃべりしながら歩いていると、後ろから「おい、おまえたち。」と肩をたたかれた。「作業のことをしゃべるなよ。」との声。特高が（私服で私たちの作業のことを知っていたので、特別高等警察の人と思った。）後をつけてきていたのだった。

検査室では、畳1枚位の大きな木箱の上にガラス板が載せてあり、中に3個位の電球がついていた。乾燥し仕上がった原紙をガラス板の上に載せ明かりをつけて、2人1組で針の先程の穴も見逃さないように検査をする。空気が入って薄くなっているところや穴を見つけたら赤の色鉛筆で丸をつけ、補修係に回す。穴を見逃すと、気球が破裂し大きな損害となるので責任は重い。腰かけてする作業なので楽になったと思っただが、強烈な明かりに目を痛め、3日目位から充血し、まぶたは乾燥してまばたきもつらい状態になった。

それから間もなくソ連の飛行機が突然新京の上空に現れて攻撃を始めた。8月9日早朝のソ連参戦だった。

空襲警報のサイレンが鳴り、初めて家の庭の防空壕に入った。私の家は無事で、被害は皇帝の宮廷府近くと南嶺であった。警報解除になったのでいつもより少し遅れて部隊に行くと、兵隊たちが大慌てで荷造りをしていた。私達数人がどうしてよいやらとまどっていると、顔馴染みの兵隊に「作業は終わった。我々は移動するのであなたたちは倉庫の中にあるものを何でも良いから持って帰りなさい。」と言われた。何でも持って行けと言われても、入れ物は小さなたすき掛けにしたカバンだけ。中に入って物色しながら、私は手拭いに砂糖を包み、カバンに入るだけ小豆を詰め、防空ずきんにマッチをいっぱい入れて帰った。その晩はおぜんざいをたらふく食べたのを覚えている。マッチは、不足して困っていた父の煙草のためだった。

この日、第4連隊の兵隊たちは南へ移動し、私達の学徒動員は終わった。

---

2006年崎山さんは、自身の体験の背景、「風船爆弾」の全体像に迫ることになります。崎山さんの戦争体験がご自身の意識の上でいかに強く「風船爆弾」と結びついたものであったのかがわかります。



風船爆弾の体験を書きたいと思っていた頃、東京神田の古書店で下記の本を見つけました。

吉野興一著『「風船爆弾」—純国産兵器「ふ号」の記録—』

(朝日新聞社出版)

☆著者は1957年東京生まれで、カトリック系ミッションスクールの暁星中学・高等学校の教師です。1995年の学校の文化祭で、高校生有志たちと「風船爆弾」をテーマに取り上げ、たまたま報道関係の協力を得られ、また、多くの方々からの協力もあり、3年間同じテーマで調査、研究を続けられたそうです。生徒が卒業した後は著者一人で聞き取り調査を続け、2000年に出版となっています。

「風船爆弾」に関する本は数冊出版されているようですが、私が初めて手にしたものでした。読んでみて、「風船爆弾」の全体像が見えてきて、規模の大きさに驚きました。

大変参考になりましたが、私は学徒動員の体験記として自分の体験したことだけを書きました。本を読んで知ったことを少し省略して書いてみます。

- 「風船爆弾」のことを「ふ号兵器」と呼び、「ふ号作戦」として昭和10年に正式に兵器として採用され、陸軍科学研究所が中心となって研究を始めています。
- 従来の気球に使われていたゴムは南方から取り寄せないといけないので、国内で調達できるものとして、和紙とこんにゃく糊が原料となりました。軽量であることも採用の理由の一つです。
- 和紙は、三桎など繊維が細くて弱いので楮を使用。昭和18年には生産地の楮は全て軍事用として差し押さえられました。高知県は日本最大の和紙産地で、楮のストックも大量にあったことから、女学生たちも総動員で、皮はぎや出荷作業をしていたと高知の同級生からも聞いています。また、和紙を漉くことも高知には家内工業だけでなく、和紙生産工場が多くありましたので大量の注文が来ましたが、男手を兵隊にとられているので、女性たちはなかなかノルマがこなせなくて過酷な労働を強いられていたとのことでした。  
昭和19年に入ってから、気球を飛ばす時期が晩秋から冬にかけて偏西風に乗せて飛ばさなければアメリカへは届かないので、時間の問題となり、更に総動員がかけられ、高知では遊郭の遊女たちまで動員したと「土佐紙業史」に書かれています。
- 一方こんにゃく蒔の生産も大変で、軍の食料用と工業用以外は全部差し押さえられ、一般の人たちの口には入らなくなりました。
- 気球の大きさは、大きいもので直径10m位で、高度維持装置の機械や爆弾、重りのための砂袋など、かなりの重量を取り付けたものだったのです。これらの製造も軍需工場だけでなく、町工場まで指定工場として生産に拍車をかけています。
- 私たちが作っていた気球原紙は、全国から指導者を東京に集めて教育し、女子挺身隊の人たちが各地で指導し、生産しています。全国の女学生が多く関わっていますが、満洲では敷島高女だけだったようです。  
高知では、県立第一高女と土佐高女が主に作業しています。ここでは広い講堂で気球原紙を直径10mに貼り合わせ、気球を作っています。この講堂は、作業している人以外警察官も立入禁止で、秘密の「マルふ」作業と言っていたようです。

○私たちの作業も大変でしたが、山口県立高等女学校の当時の生徒の話では、小倉で作業していて、日勤は朝6時から夕方6時まで、夜勤は夕方6時から朝の6時までで、いつも眠いしお腹がすいていて、夜中の12時になるとおにぎり2個とビタミン剤2粒が渡されたそうです。後で聞くとビタミン剤ではなく覚醒剤だったとのこと。それでもお国のためと家族には遺書まで書いて小倉に来たといっています。女学生が「ふ号」の気球原紙作業に動員されたのは、薄い和紙を扱うので、破れたり傷をつけたりしないように、指先の柔らかい乙女たちを採用したといわれています。

放球をするため、軍をあげて放球基地の選定、基幹将校の人選、部隊編成と慌しく準備が進み、基地は地形とか防諜上の配慮などの諸条件を満たした、福島県、茨城県、千葉県などの海岸が決定。放球期間は秋から春にかけてアメリカに向けて吹く偏西風に乗せて飛ばすのです。放球基地での訓練を重ね、昭和19年11月3日に放球開始と決定しましたが、事故があり、第一回放球は11月7日になりました。

翌年4月までに陸軍の和紙気球A式9000発、海軍のゴム気球B式が300発が放球されました。

偏西風は神風、「ふ号」は決戦兵器といわれ、日本はこれで必ず勝つと信じられていたそうです。あまりにも敵の力を知らなすぎる戦いでした。

○この「ふ号」作戦は、満洲でもソ連向けのため731部隊が関わっていたとされています。生物兵器（細菌など）搭載のための研究が進み、私たちは直径5mの気球を作っていたようです。実行の可能性もあったようですが、ソ連の参戦が予想より早く、実行には至らなかったといわれています。（日本で作っていた直径10mのものはアメリカ向け爆弾搭載用。満洲で作っていたものはソ連向け生物兵器搭載用のため直径5m）

○戦後次第に判明した「ふ号」によるアメリカ側の被害は、オレゴン、ワイオミング、モンタナ、カリフォルニア、アラスカの他、カナダ、メキシコなどにも着弾し、一部は爆発して山火事などを起こしています。人の被害は、オレゴン州で、牧師夫妻と日曜学校に通う5人の子どもたちがピクニックに出掛け、車から先に降りた牧師夫人と5人の子どもたちが落ちていた「ふ号」に触れ、爆死しています。

○翌昭和20年、本土への空襲が激しくなり、偏西風も吹かなくなったので「ふ号」作戦は4月に中止になっています。私たちはその後もソ連参戦の8月9の日まで作業を続けていたのは、ソ連向けだったからだと思います。

大変な時代を生きてきた私たちは、この本の著者のように後世に伝えていく必要を改めて強く感じたことでした。

---

崎山さんは2010（平成22）年5月には、満洲関係の資料収集を始めています。事実、翌年秋には、父信義さんの満洲国協和会関係者にも呼びかけの手紙を送っています。

---

10月に入り朝夕急に冷え込んでまいりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

突然ではございますが、「協和会」のお世話を長い間して下さった馬場永子様のご紹介で、お手紙を出ささせていただいております。私は、父・崎山信義（終戦時、協和会総監部総務課第二課長）の三女です。

去る9月10日、豊中で協和会ゆかりの方々のお集まりの折、お話をさせていただきますましたが、現在私は、「高知移住文化資料保存会」の会員として資料収集をしております。

父は、高知に引き揚げて来てから勤めの傍ら、主として高知にゆかりのある方々の伝記などの執筆をし、出版もしておりました。その折集めた資料が多くあり、父の死後、私はそれらを整理して公共の資料館に寄贈しました。その延長として、大正の初めから東京世田谷で海外植民学校を開き、ブラジルに移住した父の兄 崎山比佐衛の関係資料もブラジル関係のものと共に収集、寄贈してきました。

また、引き揚げ時、世話役たちに配布された引き揚げの手引書『遣送便覧』を父が持ち帰っており、大変貴重な資料でしたので、これは東京の国立国文学研究資料館にご縁のあった加藤聖文氏を通して寄贈しました。

このような経緯から、満洲関係の資料集めに力を入れるようになりましたが、何しろ引き揚げ時には写真、本、文書類は何も持ち帰ることができませんでしたので、大変苦勞しております。戦前帰国していた方や、内地の親戚などに送ってあったものなどが少しずつ集まってきております。現在は、会員たちの努力で、朝鮮、樺太などからも集まってきております。

既に60年から100年以上の時を経て、貴重な資料が失われつつあります。一刻も早く、一人でも多くの方にご協力いただき、写真、文書類、書籍、物品などを提供していただき、今後の研究に寄与したいと思っております。趣旨をご理解のうえ、どうぞよろしくお願い申し上げます。

季節の変わり目ですので、どうぞご自愛下さいませ。

2011年10月 日  
様

かしこ  
崎山ひろみ

追伸 資料は出所を、写真は場所や人名をできるだけご記入していただければありがたく存じます。

---

資料の収集に尽力される中、崎山さんの活動は、報道関係も注目するようになります。2013年3月23日『高知新聞』はその活動を大きく紹介します。(次頁をご覧ください)そして、同年10月、崎山さんはいよいよ旧満洲関係者への聞き取り調査を始められ、その活動は現在も続いています。

※

「崎山ひろみ文庫」は、旧「満州」引き揚者関係書籍を、‘一体的’に設置した高知県内最初の資料庫といえます。

‘一体的’とは、〈引き揚げ者〉という視点から、①個々に引揚体験を語る証言の書より、②戦後長い時間を経て「満洲」の生活全体を回想する書、そして③当時の生活、引き揚げ体験の真相、歴史的 성격に自ら迫ろうとするため用いた研究書、参考書まで一かかると関係性を一体的に確認できるという意味であり、そこに本文庫の学術的価値も亦あると考えます。

「崎山ひろみ文庫」が、今後県内だけでなく県外の方にも広く知られて教育・研究の資料として活用され、高知県の新たな平和研究のシンボルとなることを願っております。



# 「満州の実態伝えたい」

16歳で旧満州(中国東北部)から引き揚げた体験を胸に、日本の近現代史研究に取り組む崎山ひろみさん(82)＝高知市西栗原寺＝が近く、約半世紀にわたって集めた満州関係の資料約300点を県立歴史民俗資料館(南国市岡豊町)に寄贈する。「何とかして後世に満州の実態を伝えたい」と崎山さん。歳月がたつとともに捨てられ、紛失していく資料の提供を、さらに呼び掛けている。(山崎彩加)

## 高知市の崎山さん

日本は、日露戦争(19)に柳条湖事件を起し、32(04・05年)後に満州進出年にかいらい国家「満州の足掛かりを得ると、31年「国」を建国。国策で大規模



「資料をたくさんの人に見てもらいたい」と話す崎山ひろみさん(写真はいずれも高知市西栗原寺の自宅)

## 資料300点 歴民館に寄贈へ 引き揚げ胸に半世紀収集



故入交好保さんの荷物には「清藤壽吉君 三十歳」「旭国防婦人会」と書かれた詳細不明の旗も

な農業開拓移民を推し進めた。終戦までに全国で約27万人、本県は約1万人が開拓された。引き揚げは、ぎゅうりゅうの結核の蔓延の根のない列車、船を乗り継ぎ20日以上

崎山さんは30年に撫順市に生まれ、終戦当時は首都の新京(現在の長春)に暮らしていた。日本敗戦後、ソ連兵による略奪や女性への暴行が行われ、15歳だった崎山さんも丸刈りにし、ソ連兵の声がやむまで物置に隠れるなどして必死に逃れた。引き揚げは、ぎゅうりゅうの結核の蔓延の根のない列車、船を乗り継ぎ20日以上かけて福岡県の博多港へ。知識を深めていった。収集した書籍、資料は約400点に及ぶ。自宅は、付箋を貼った資料にあふれ、入手困難なものが多数。引き揚げ者に関する資料は、当時の満州の地図や紙幣、抗日軍や日本軍の写真なども、書籍や資料の大半を同資料館に寄贈しようと決めた。2011年以後は、東京や千葉、大阪に住む父親の同窓会を機に満州から約20人に声を掛けるなど、さらに収集に奔走している。

「私のいた満州は、桂浜の坂本龍馬の体験を聞いた。」とても悲愴で、都会に住んでいた私の経験とあまりにも違っていた。シヨックを受けた。私の体験なんか言えないと、思った」と話す。

「私のいた満州は、どうして成り立って、終焉(しゅうえん)を迎えたか歴史を知りたい。二度と同じ道を歩まないように訴えていくのが私の使命」

98年には引き揚げの経緯などをまとめたドキュメント「タリ〜映画『胡蘆(ころ)』」をまとめた。一日も早く島大道返り日本人難民の方を引揚げの記録を高知市で上映し、語り部を始めた。同時に本県や東京の古本屋で文献を探しては入手し、872・0540へ。

最近、桂浜の坂本龍馬像建立者の一人である故入交好保さんの遺族から、入交さんが満州から引き揚げた時に、衣類に付けていた名前入りの布やコートなどの提供を受けた。

紙幣や写真などを一枚ずつ袋に入れ、集めた資料もリストを作るなどし、寄贈準備を進める崎山さん。「資料があるような話があったら飛んでいくんだ」と、行く少し前に捨てられたいりする。一日も早く島大道返り日本人難民の方を引揚げの記録を高知市で上映し、語り部を始めた。同時に本県や東京の古本屋で文献を探しては入手し、872・0540へ。



## 満洲国の歴史と私の暮らし

西暦年 年(元号)月日	私の暮らし	
1894 明治 27 年 ～		日清戦争→台湾植民化 (日本人戦死者 17,041人)
1895 明治 28 年	父 崎山 <sup>ノブヨシ</sup> 信義高知県本山村(現本山町)に誕生	欧米列強国のアジア・アフリカ植民地化進む
1898 明治 31 年	母 滋子 <sup>シゲコ</sup> 北海道札幌市誕生	
1907 明治 37 年 ～		日露戦争→満洲植民地化 (日本戦死者120,000人、ロシア人115,000人)
1910 明治 43 年		朝鮮植民化
1924 大正 13 年	両親 満洲に渡る(父、満鉄に就職)	
1928 昭和 3 年 6 月 4 日		満洲で張作霖爆殺事件
1930 昭和 5 年 6 月 13 日	満洲撫順市でひろみ誕生 (父、満鉄撫順炭鉱事務所)	
// 12 月	大連へ転居	
1931 昭和 6 年 9 月 18 日		満洲事変(柳条湖事変 9.18事変)
1932 昭和 7 年 3 月  // 9 月		満洲国建国宣言 清国のラストエンペラー溥儀 執政に就任(1934年皇帝に就任) 武装開拓団 試験入植開始 平頂山事件
1933 昭和 8 年 3 月		国際連盟脱退
1934 昭和 9 年	妹(洋子 ヨウコ)誕生	開拓団 本格的移民開始(100万戸計画)
1936 昭和 11 年	首都新京に転居(父、満洲国協和会へ転職) 母の里帰りのため妹(洋子)と3人で東京へ	2.26事件(東京)
1937 昭和 12 年 4 月	白菊小学校(新京)へ入学	盧溝橋事件 日中戦争へ 満蒙開拓少年義勇隊員募集開始
1938 昭和 13 年	弟(健三 ケンゾウ)誕生	
1941 昭和 16 年 12 月 8 日		太平洋戦争開戦
1943 昭和 18 年 4 月	敷島高等女学校(新京)へ入学 寄宿舍生活	学徒戦時動員体制確立
1945 昭和 20 年 5 月  // 5 月 30 日  // 7 月 26 日 // 8 月 6 日 // 8 月 9 日	「学徒動員」の中、「和紙風船づくり」(風船爆弾づくり)にソ連参戦まで従事させられる(帰国後50年以上経って始めて書物で「731部隊」関係の作業にも関わっていたことを知る)	大本営 満洲の4分の3の放棄を命令 第1の「棄民」 米・英・中によるポツダム宣言発表 広島へ原爆投下 ソ連対日参戦 ソ連軍満洲国境突破 長崎へ原爆投下

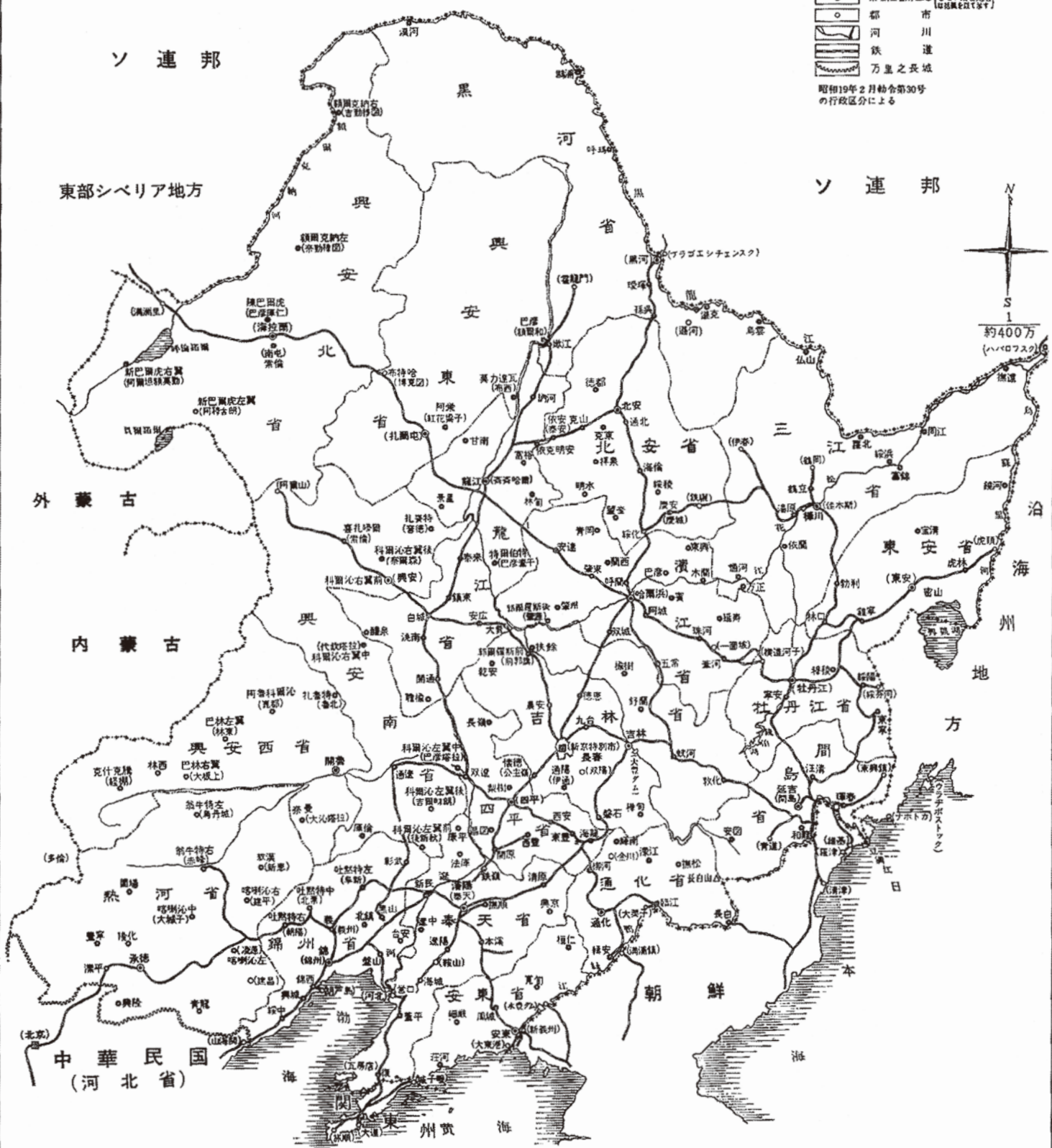
// 8月10日	在満日本人の逃避行始まる	
// 8月13日	家族5人 協和会住宅の方々(約20世帯)と一緒に避難行に出る	
// 8月14日		日本政府、ポツダム宣言受諾
// 8月15日	<b>敗戦</b> 避難先(新京郊外南30km)空き家となった兵舎(中国人集落近く)のラジオで玉音放送を聴く	日本無条件降伏 第2の「棄民」 「居留民は出来得る限り定着の方針を執る」 「日本国籍を離るるも支障なきものとす」
// 8月16日	新京の協和会住宅に帰る	
// 8月18日	父 南満洲へ避難民救済のため出かける 母子4人での生活(新京)が始まる	
1946 昭和21年5月		在満日本人の引揚げ開始
// 7月	父 新京に帰る	
// 8月	家族全員で引き揚げ	
1946 昭和21年9月12日	日本へ帰国 日本の地を踏んで <b>この時が終戦と思う</b>	
// 10月1日	高知県立高知高等女学校へ転校	
1949 昭和24年4月	高知県立高知高等女学校を卒業	
// 7月	就職	
1955 昭和30年4月	結婚 後、娘二人誕生	
1988 昭和63年3月31日	定年退職	
1998 平成10年12月	満洲より引揚げ者の集い結成	
2007 平成19年9月	高知新京会編『遙かなる満州一郷愁、そして悲惨な引き揚げへ』(高知新聞社)発刊	
2010 平成22年5月	満洲関係の資料収集の呼びかけ	
2013 平成25年10月	満洲関係の聞き取り始め	
(そのほか) 2005 平成17年6月	伯父崎山比佐衛 ブラジル関係資料収集 → 高知県立歴史民俗資料館へ寄贈	

※ 崎山ひろみさんには、すでに「満州(中国東北部)の歴史と私の暮らし」(高知「新京会」編『遙かなる満州 郷愁、そして悲惨な引き揚げへ』高知新聞企業出版調査部 2007年 所収)を発表しておられます。ご参照ください。



# 満洲国全図

- 凡例
- 国界
  - 省界
  - 省公署所在地
  - 県公署所在地
  - 都市
  - 河川
  - 鉄道
  - 万里之長城
- 昭相19年2月勅令第30号の行政区分による



※この「満洲国全図」は、加藤聖文・田畑光永・松重充浩編著『挑戦する満洲研究—地域・民族・時間—』（東方書店 2015年）に掲載されているものを転載させていただいた。本書v頁には次のような解説が書かれている。「図中右上の「凡例」最下段に「昭和19年2月勅令第30号の行政区分による」とあり、この地図は満洲関係の多くの書籍に掲載されている。本書は国際善隣協会編『満洲建国の夢と現実』（昭和50年・謙光社）掲載のものを使用。」

